

1/9 Sat.

第234回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.234 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

1/10 Sun.

第234回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.234 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Principal Conductor
ヴァイオリン
Violin
コンサートマスター
Guest Concertmaster

R. シュトラウス
R. STRAUSS

ブルッフ
BRUCH

[休憩]
[Intermission]

ドヴォルザーク
DVOŘÁK

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5

SEBASTIAN WEIGLE

金川真弓 -p.6

MAYUMI KANAGAWA

伝田正秀 (ゲスト)

MASAHIDE DENDA

交響詩〈ドン・ファン〉 作品20 [約17分] -p.8

Don Juan, op. 20

ヴァイオリン協奏曲 第1番 ト短調 作品26
[約24分] -p.9

Violin Concerto No. 1 in G minor, op. 26

I. Prelude : Allegro moderato – II. Adagio

III. Finale : Allegro energico

交響曲 第9番 ホ短調 作品95
〈新世界から〉 [約40分] -p.10

Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"

I. Adagio – Allegro molto

II. Largo

III. Molto vivace

IV. Allegro con fuoco

1/14 Thu.

第638回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.638 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

ラフマニノフ
RACHMANINOFF

[休憩]
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5

SEBASTIAN WEIGLE

藤田真央 -p.6

MAO FUJITA

長原幸太

KOTA NAGAHARA

ピアノ協奏曲 第3番 ニ短調 作品30 [約39分] -p.12

Piano Concerto No. 3 in D minor, op. 30

I. Allegro ma non tanto

II. Intermezzo : Adagio – III. Finale : Alla breve

交響曲 第4番 ヘ短調 作品36 [約44分] -p.13

Symphony No. 4 in F minor, op. 36

I. Andante sostenuto – Moderato con anima

II. Andantino in modo di canzona

III. Scherzo : Pizzicato ostinato. Allegro

IV. Finale : Allegro con fuoco

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）



独立行政法人日本芸術文化振興会

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）



独立行政法人日本芸術文化振興会

※本公演では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

1/19 Tue.

第605回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.605/ Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
ヴァイオリン
Violin
コンサートマスター
Concertmaster

R. シュトラウス
R. STRAUSS

ハルトマン
HARTMANN

[休憩]
[Intermission]

ヒンデミット
HINDEMITH

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5
SEBASTIAN WEIGLE

成田達輝 -p.7
TATSUKI NARITA
長原幸太
KOTA NAGAHARA

交響詩〈マクベス〉 作品23 [約18分] -p.15
Macbeth, op. 23

葬送協奏曲 [約20分] -p.16
Concerto funebre
I. Introduction : Largo
II. Adagio
III. Allegro di molto
IV. Choral : Langsamer Marsch

交響曲〈画家マティス〉 [約25分] -p.17
Symphony "Mathis der Maler"
I. 天使の奏楽
II. 埋葬
III. 聖アントニウスの誘惑

※当初の発表から出演者が一部変更されました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック

指揮

セバスティアン・ヴァイグレ
(常任指揮者)

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

ヴァイグレの指揮で
新年の幕開け！
若き才能とも共演



©読響

ドイツを代表する名匠が、12月に引き続き登場。ヒンデミットやR. シュトラウスなど得意のドイツ音楽から、ラフマニノフやチャイコフスキーのロシア作品まで、バラエティに富んだプログラムを披露する。

1961年ベルリン生まれ。82年からベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者として活躍後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者に転向。2003年にフランクフルト歌劇場でR. シュトラウス〈影のない女〉を振り、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれた。04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務め、ベルク〈ヴォツェック〉やワーグナー〈タンホイザー〉など数々の名演奏を繰り広げた。07年にはワーグナー〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉でバイロイト音楽祭にデビュー。11年まで指揮し、世界的注目を浴びた。08年からフランクフルト歌劇場音楽総監督の任にある。11年に同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に選ばれ、15年と18年にも同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に輝くなど、その手腕は高く評価されている。

これまでに、メトロポリタン歌劇場、ベルリン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場などに客演を重ねるほか、ザルツブルク音楽祭にも出演、また、ベルリン放送響、ウィーン響などを指揮し、国際的に活躍している。読響には16年8月に初登場。オペラでは17年の東京二期会のR. シュトラウス〈ばらの騎士〉、19年の同〈サロメ〉(第28回三菱UFJ信託音楽賞受賞)で共演し、いずれも好評を博した。

1/9
土曜マチネー

1/10
日曜マチネー

1/14
名曲

1/19
定期

Maestro

1/9
土曜マチネー

1/10
日曜マチネー

Artist



©Kaupo Kikkas

ヴァイオリン

金川真弓

MAYUMI KANAGAWA, Violin

音楽への飽くなき探求心と、豊潤かつ深い音色で国際的に活躍する新鋭。ドイツ生まれ。4歳から日本でヴァイオリンを始め、12歳でロサンゼルスに移り、現在はベルリンを拠点としている。ハンス・アイスラー音楽大学でコリヤ・ブラッハーに師事。2019年チャイコフスキー国際コンクール第4位、18年ロン＝ティボー国際音楽コンクール第2位入賞および最優秀協奏曲賞を受賞し、一躍注目を浴びた。これまでに、プラハ放送響、マリンスキー劇場管、モスクワ・フィル、フィンランド放送響、ドイツ・カンマーフィルなどと共演し、アスペン音楽祭、ヴェルビエ音楽祭などにも参加している。使用楽器は、ドイツ演奏家財団のドイツ国家楽器基金から貸与されたペトルス・グアルネリウス（マントヴァ、17世紀後半製作）。読響初登場。

1/14
名曲

Artist

2019年のチャイコフスキー国際コンクールで第2位を受賞。審査員や聴衆から熱狂的に支持され、ネット配信を通じて世界的に注目された気鋭。1998年東京生まれ。2017年、クララ・ハスキル国際ピアノ・コンクール優勝。これまでに、ゲルギエフ、ワシリー・ペトレンコ、カエターニ、小林研一郎、山田和樹、カーチュン・ウォンらの指揮で、マリンスキー歌劇場管、ミュンヘン・フィル、ユタ響、ローザンヌ室内管、N響、東京都響などと共演。20年7月には、オンラインで開催されたヴェルビエ音楽祭に参加した。21年の春からは、3年5回にわたる「モーツァルト：ピアノ・ソナタ全曲演奏会」をスタートする予定。20年にホテルオークラ音楽賞、出光音楽賞を受賞。読響とは19年3月以来、2度目の共演となる。



©EIICHI IKEDA

ピアノ

藤田真央

MAO FUJITA, Piano



©Marco Borggreve

ヴァイオリン

成田達輝

TATSUKI NARITA, Violin

卓越した技巧を持ち、熱いパッションを漲らせる若き実力派。1992年生まれ。パリ国立高等音楽院で学ぶ。2010年のロン＝ティボー国際コンクール、12年のエリザベート王妃国際コンクールとともに第2位に輝き、注目を集めた。これまでにクリヴィヌ、アルトリヒテル、インキネン、小林研一郎、尾高忠明、下野竜也、山田和樹らの指揮で、ブリュッセル・フィル、ルクセンブルク・フィル、プラハ響、N響、東京響、東京フィルと共演している。ホテルオークラ音楽賞、出光音楽賞など受賞多数。一柳慧、酒井健治らの作品を初演するなど、現代作品にも意欲的に取り組んでいる。使用楽器は、宗次コレクションから貸与された1711年製のストラディヴァリウス「タルティーニ」。読響とは2012年以来、2度目の共演。

1/19
定期

Artist

1/9

土曜マチネー

1/10

日曜マチネー

Program Notes

R. シュトラウス

交響詩〈ドン・ファン〉 作品 20

ドン・ファンといえば、伝説の好色家のこと。現代でもプレイボーイの代名詞として用いられる言葉だが、その起源は17世紀のスペインにまで遡る。名家の息子ドン・ファンが貴族の娘を誘惑し、その父を殺すが、父親の石像が晩餐に現れてドン・ファンを地獄へと引きずり込む。モーツァルトがオペラ化した〈ドン・ジョヴァンニ〉でおなじみのストーリーだが、この伝説はモリエールやバイロン、プーキンらによってくりかえし文学の題材にされている。若き日のリヒャルト・シュトラウス(1864～1949)が参照したのは、オーストリアの詩人ニコラウス・レーナウの叙事詩。初版のスコアにはこの叙事詩から3つの場面が引用されている。簡潔に要約すれば、女性と快楽の讃美、ひとつの出会いに情熱を燃やし尽くしてまた新たな恋を求めるという信条の表明、そして愛と情熱の終焉という部分からなる。

1888年、シュトラウスは交響詩〈マクベス〉に続いてこの〈ドン・ファン〉を書きあげた。翌年、名指揮者ハンス・フォン・ビューローの推薦により、シュトラウスはワイマール歌劇場の副指揮者に就任する。その際、完成済みの〈ドン・ファン〉をピアノで披露すると、ワイマールの雇用主たちは感銘を受け、ぜひ自分たちが初演を行いたいと主張した。シュトラウスは作品が要求する技術的な難度に同地のオーケストラが応えられるか案じたものの、初演は大きな成功を収め、作曲者の名声を一躍高めることになった。

勢いよく跳躍するような冒頭主題はドン・ファンの放埒^{ほうらつ}な性格を表現する。続いて優美なヴァイオリンのソロが奏でられ、ロマンスが始まる。しかし甘美な時間は長続きしない。ふたたびドン・ファンの主題が現れ、次の恋へと向かう。ホルンの勇壮な主題を経て新たな冒険が続くも、最後は息絶えるように終わる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1888年／初演：1889年11月11日、ワイマール／演奏時間：約17分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、グロッケンシュピール、シンバル、サスペンデッド・シンバル）、ハープ、弦五部

ブルッフ

ヴァイオリン協奏曲 第1番 ト短調 作品 26

ドイツの作曲家、マックス・ブルッフ(1838～1920)は早熟の天才として若くして注目を浴び、しかも82歳まで生きた長命な作曲家だった。多数の作品の中で、ずば抜けて知名度の高いのが、20代後半に書いたヴァイオリン協奏曲第1番である。1866年、音楽監督を務めていたコブレンツで、オットー・フォン・ケーニヒスレーフの独奏、自身の指揮により初演され、改稿を経て、1868年にヨーゼフ・ヨアヒムの独奏により現行版が初演された。ヨアヒムは「ドイツ人は4つのヴァイオリン協奏曲を持っている。もっとも偉大なベートーヴェン、それに深刻さで匹敵するブラームス、もっとも豊かで魅惑的なブルッフ、内面的な心の宝石のメンデルスゾーン」と語り、ブルッフを大作曲家たちの列に並べた。

しかし、時流に乗ることなく保守的な作風を堅持したブルッフは、やがて時代から取り残されてゆく。第2番、第3番のヴァイオリン協奏曲も書かれたが、演奏機会は少ない。晩年のブルッフは「あと50年もすれば私の名前はヴァイオリン協奏曲第1番でしか記憶されていないだろう」と嘆いた。その予言はかなりのところ的中しているが、むしろ、この曲は作曲者の想像を超える評価を獲得したともいえる。1996年、イギリスのラジオ局が行ったリスナーの人気投票 Classic FM Hall of Fame では、古今の名曲を抑えてこのヴァイオリン協奏曲が第1位に輝いた。

第1楽章 前奏曲 アレグロ・モデラート 当初の構想では「序奏的幻想曲」。短い序奏に続いてすぐに独奏ヴァイオリンが登場する点や、切れ目なく第2楽章に続く趣向はメンデルスゾーンゆずり。情熱的で雄大な楽想が展開される。

第2楽章 アダージョ 独奏ヴァイオリンが憧憬^{どうけい}に満ちた主題を奏で、管弦楽が柔らかな響きでこれに寄り添う。豊かでみずみずしい口マンが横溢する。

第3楽章 アレグロ・エネルギー 勇壮な舞曲風主題に導かれるフィナーレ。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1864～67年／初演：1866年4月24日、コブレンツ（初稿）、1868年1月7日、ブレーメン（改訂稿）／演奏時間：約24分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

1/9

土曜マチネー

1/10

日曜マチネー

Program Notes

1/9

土曜マチネー

1/10

日曜マチネー

Program Notes

ドヴォルザーク

交響曲 第9番 ホ短調 作品95 〈新世界から〉

人生において異国で新たな挑戦を始めるとしたら、何歳まで可能だろうか。チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）のもとに、新大陸アメリカから思わぬオファーが届いたのは1891年のこと。裕福な食品卸売業の夫を持つジャネット・サーバーから、ニューヨークに設立するナショナル音楽院の院長に就任してほしいと依頼されたのである。すでにヨーロッパで名声を築き、この年50歳を迎えるドヴォルザークは、当初この依頼を断った。ジェット機が飛び交う現代と違い、アメリカは長い船旅を要するはるか彼方の新世界。50歳にもなってそんな冒険が必要だろうか。だがサーバー夫人は粘り強く交渉を続け、桁外れの高額報酬を提示した。ドヴォルザークは悩んだ末にアメリカ行きを決意する。

この決断は、ドヴォルザークに経済的利益ばかりか芸術上の大きな収穫をもたらすことになった。ドヴォルザークはアメリカで黒人霊歌や先住民の音楽から多くの刺激を受ける。そして新世界から得たインスピレーションと祖国への望郷の念を、自ら「わずかにアメリカ風である」と認める交響曲第9番へと結実させた。

第1楽章 アダージョ〜アレグロ・モルト 予感に満ちたゆるやかな序奏に、緊迫感みなぎる主部が続く。決然として雄渾な楽想がくりひろげられる。

第2楽章 ラルゴ イングリッシュ・ホルンによる郷愁を誘うメロディは、「遠き山に日は落ちて」あるいは「家路」の題でもよく知られる。

第3楽章 モルト・ヴィヴァーチェ 民俗舞曲風の活発なスケルツォ。トライアングルの使用が印象的。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ あたかも機関車が徐々に速度をあげて爆走するかのように開始される。全曲でただ一度、シンバルが控えめに鳴る場面は、大の鉄道ファンだった作曲者が密かに仕込んだ「列車の連結音」か。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1893年／初演：1893年12月16日、ニューヨーク／演奏時間：約40分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル）、弦五部

ラフマニノフ

ピアノ協奏曲 第3番 二短調 作品30

ロシアの作曲家セルゲイ・ラフマニノフ（1873～1943）は、1909年秋、初めてのアメリカ演奏旅行に出かけた。フィラデルフィア、シカゴ、ボストン、ニューヨークの各都市でリサイタルを行い、オーケストラを指揮し、協奏曲のソリストとしても舞台に立った。ピアノ協奏曲第3番は、この演奏旅行のために書かれ、ラフマニノフ自身のピアノとダムロッシュ指揮のニューヨーク・フィルハーモニックによって初演された。

ピアノ曲の最高峰に数えられるこの協奏曲は、前作の第2番（1900～01）より至難な演奏技巧が要求される。ピアニスト最大の腕の見せどころとも言える第1楽章のカデンツァ、響きの厚い和音の連続で進められる終楽章、ピアノとオーケストラが一体となったエネルギッシュなコーダも迫力がある。もちろん技巧だけでなく、ラフマニノフの音楽の特徴である、スケールの大きな叙情や甘美なロマンティズムに溢れ、第2楽章の深々とした音楽も魅力的である。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・タント、二短調、4/4拍子 オーケストラに導かれ、ピアノがシンプルだが心を打つ第1主題を示す。ラフマニノフは否定しているが、ロシア民謡との関連が指摘され、夢見るような第2主題も民謡風である。2つの主題が展開し、ピアノの華やかなカデンツァを経て、短い再現部となる。

第2楽章 間奏曲：アダージョ、イ長調、3/4拍子 調号はイ長調だが、第1楽章から引き続き二短調で、オーボエから始まる哀愁を帯びた美しい旋律がつづられる。中間部（ピウ・ヴィーヴォ）はピアノが鮮やかな活躍をみせ、再び主部が戻り、終盤の勢いのまま切れ目なく終楽章に入る。

第3楽章 フィナーレ：アラ・プレーヴェ、二短調、2/2拍子 ピアノがリズムカルな力強い第1主題を示す。やがて叙情的な第2主題が現れ、きらびやかに高音を輝かせ、ラフマニノフ特有の鋭いリズムで、生命力に満ちた音楽が前進する。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1909年／初演：1909年11月28日、ニューヨーク／演奏時間：約39分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル）、弦五部、独奏ピアノ

チャイコフスキー

交響曲 第4番 ヘ短調 作品36

「わが最良の友に」と献呈の辞が付されたピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）の交響曲第4番は、1877年から翌年にかけて作曲された。1877年は作曲家の人生において大きな転機となる年で、それは、大富豪の未亡人ナジェジダ・フォン・メックとの文通のみによる交遊の開始や、ミリューコヴァとの突然の結婚と離婚が関係している。メック夫人との関係は、チャイコフスキーの音楽に興味をもっていた彼女が、前年末にいくつかの編曲を依頼したことをきっかけに、直接会うことを避けた奇妙な付き合いが始まった。2人の間には膨大な往復書簡が残され、それはチャイコフスキーの創作状況や心の内を伝えるものとなっている。「わが最良の友」というのもメック夫人に他ならない。さらに彼女が1877年秋に作曲家に莫大な経済支援を申し出てくれたことによって、チャイコフスキーは、モスクワ音楽院での教授活動や経済面での不安から解放され、創作に専念できるようになった。

その一方で、モスクワ音楽院の学生だったミリューコヴァからの突然の告白は、チャイコフスキーを驚かせ、悩ませた。自殺をほのめかす強迫めいた手紙で結婚を迫られ、一度は拒絶したものの彼女との結婚を選んだ。結婚生活は3週間で破綻し、妻から逃げるように家を出る。夏休みを終えてモスクワに戻らなければならなくなると、その緊張から入水自殺を図るほど精神は衰弱した。結局、弟アナトリーに連れられてペテルブルクに逃れ、翌年春までスイスやイタリアで静養することになった。こうしたなかで作曲された交響曲第4番は、チャイコフスキーの人生を象徴するかのよう激情に満ちている。

チャイコフスキーは、メック夫人に宛てた手紙の中で本作を「我々の交響曲」と呼び、楽曲の内容について細かく伝えているが、そのときの心情についても「体験したことへの激しさや恐ろしさの記憶が全体に残っています」と記している。

第1楽章 アンダンテ・ソステヌート、ヘ短調、3/4拍子～モデラート・コン・アニマ、9/8拍子 ソナタ形式。序奏のファンファーレは、チャイコフスキーが「運命の動機」としたモチーフに基づく。このリズムは、19世紀のロシアのオペラやバレエでたびたび用いられたポロネーズのリズムに由来する。主部は、付点のリズムが特

微的な第1主題による不規則なワルツで始まり、軽やかな第2主題はクラリネットから木管楽器に受け渡される。2つの主題がドラマティックに展開され、形式の節目でファンファーレが異様な緊張を伴いながら現れる。

第2楽章 アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ、変口短調、2/4拍子 3部形式。鄙びた旋律がオーボエで奏され、チェロに受け継がれた後、オーケストラ全体に広がっていく。この旋律は、チャイコフスキーが愛したイタリア民謡の模倣とも言われる。中間部（ピウ・モツ）は歯切れがよく、憂鬱な気分もいくらか晴れる。

第3楽章 スケルツォ：ピッツィカート・オスティナート：アレグロ、ヘ長調、2/4拍子 終始ピッツィカートで奏される弦楽器、素朴な木管合奏、弱音の金管主体の行進曲が、鮮やかな対比を見せる。チャイコフスキーによれば、この楽章は「ほろ酔い気分のときに脳裏をかすめる、気まぐれなアラベスク」。

第4楽章 フィナーレ：アレグロ・コン・フオーコ、ヘ長調、4/4拍子 ロンド形式。旋回する強烈なロンド主題、ロシア民謡〈野に立つ白樺の木〉による主題や陽気な主題が交互に現れる。最後に「運命の動機」によるファンファーレが威嚇するが、これらの主題によって不穏な影は一掃され、圧倒的な力で突き進み熱狂のまま結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1877～78年1月9日／初演：1878年2月22日、モスクワ／演奏時間：約44分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、大太鼓、シンバル）、弦五部

R. シュトラウス 交響詩〈マクベス〉 作品23

作曲家の創作期には、前後が分かち難く連続的である場合と、きっぱりとデジタルに様相を変える場合との2通りがある。リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）の初期から第2期への転換は、後者の例のひとつだ。

シュトラウスは1886年、交響的幻想曲〈イタリアから〉を書き上げた。それまで、アカデミックな作曲の範疇で純器楽と歌曲とに取り組んできた作曲家が、この作品で初めて標題音楽へと針路をとった。同時に、このジャンルの命とも言うべき管弦楽法の工夫に邁進する。

デジタルな変化は続く。次作の〈マクベス〉で作曲家は、完全に交響詩の世界へと歩みを進める。多楽章制から単一楽章へ、全音階から半音階へ、色彩的な和音の連続から緊張感を左右する和声進行へ。前作から今作への一歩は創作上、歩幅が大きい。

ただし、こうした音楽上の特徴の多くは、短調部分にのみあてはまる。長調部分には前時代のスタイル、つまり、ある種の明快さが尾を引く。そのことにより、進歩的で、怪しくも繊細な音楽的グラデーションを示す短調部分と、古風で、そのぶん分かりやすく進む長調部分とが、はっきりとしたコントラストを織り成す。この対比もまた、図式としては少し古いスタイルに属していよう。このように、先進性と懐古趣味とが半ばするような性格は、この交響詩の個性といえ個性だ。

「マクベス」は言わずと知れたシェイクスピアの名作。主人公は、王を殺して王位に就き、親しい仲間を殺して安堵し、敵の妻子を殺して見せしめにする。「血が血を呼ぶ」（第3幕第4場）のである。結局、罪悪感に苛まれたマクベス夫人は謎の死を遂げ、マクベス自身は戦いに敗れて首をはねられる。

この筋書きに、魔女や予言、亡霊などが“幻想”を持ち込む。筋書きのダイナミクスと、超自然的存在の幻想性とを表現するには、この作品の過渡的なスタイルはむしろ、功を奏しているのかもしれない。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1888年（第1稿）、1890年（第2稿）、1891年（第3稿）／初演：1890年（第2稿）、ワイマール、1892年（第3稿）、ベルリン／演奏時間：約18分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、バストランペット、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、銅鑼）、弦五部

ハルトマン
葬送協奏曲

1933年1月30日、ドイツの大統領ヒンデンプルクは、アドルフ・ヒトラーを首相に任命した。ヒトラーは就任後、速やかに全権委任法を成立させ、憲法を停止、独裁体制を打ち立てる。

こうした動きに真っ向から反対したドイツ人が各界にいた。楽壇でもっとも強くナチス政権に抗ったのが、カール・アマデウス・ハルトマン（1905～63）だ。ハルトマンは1933年、全体主義の空気に反するように〈ミゼーレ（悲惨なる）〉を書き、政府から「退廃音楽家」の烙印を押された。にもかかわらず作曲家は、36年には交響曲断片〈レクイエムの試み〉を、40年には〈悲劇的シンフォニア〉を立て続けに作曲し、反ナチスの姿勢を明確にする。それと引き換えにハルトマンは、宣伝相ゲッベルスに激しく非難され、国内ではもはや、いないも同然の存在となった。

独奏ヴァイオリンと弦楽合奏のための〈葬送協奏曲〉（1939年）は、こうした文脈の中で生まれた作品のひとつだ。国内では上演のあてもない。しかし作曲家は、日の目を見るときを信じて作曲を続けた。散逸を防ぐため「（この時期の）楽譜を山中の地下2メートルに埋めた」と戦後、証言している。実際、〈ミゼーレ〉にせよ〈葬送協奏曲〉にせよ、その初演はドイツ国外だ。前者は35年にチェコのプラハで、後者は40年にスイスのザンクト・ガレンで発表された。

イントロダクション（第1楽章）では、レチタティーヴォ風の合いの手を伴って独奏ヴァイオリンが、野辺送りの歌を思わせる簡素な旋律を奏でる。第2楽章は開始こそ切迫した様子だが、以後は穏やかな部分と緊張感のある部分とが交錯する。緊張感の高まりは音域の上昇と結び付けられる。4つの楽章で唯一、速いテンポをとるのが第3楽章。軍隊ラッパのような同音反復が印象的だ。第4楽章はコーラル。四声体風の弦楽合奏の上で独奏ヴァイオリンが、緩やかに“行進”していく。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1939年、1959年（改訂稿）／初演：1940年、ザンクト・ガレン（スイス）／演奏時間：約20分
楽器編成／弦五部、独奏ヴァイオリン

ヒンデミット
交響曲〈画家マティス〉

ドイツとの国境地帯にたたずむ運河の町、フランス・コルマル。市街には堂々とした木組みの家々が並ぶ。そんなコルマルの市庁舎を起点に西へ200mほど歩くと、ウンターリンデン美術館がある。ここで見逃してならないのは「イーゼンハイム祭壇画」（1515年）だ。作者はマティアス・グリュネヴァルト。本名をマティス・ゴットハルト・ナイトハルト（1470／75頃～1528）という。

この祭壇画はもともと、イーゼンハイム（コルマルの南約20km）の修道院にあった。グリュネヴァルトは祭壇の観音開きの扉に、キリストや聖人らを描きこんだ。それを開け閉めすることで、時に応じて異なる画面を示す。

パウル・ヒンデミット（1895～1963）は、このグリュネヴァルトと「イーゼンハイム祭壇画」とに触発されて、交響曲〈画家マティス〉を書き上げた。ただし、その過程はいくぶん複雑だ。

まずは契機の点から。1930年代に入りヒンデミットは、モダニズムから新古典主義へと作風を変えた。もちろんそれは、芸術上の内的欲求に基づくものではある。同時に当時の社会情勢に対する慮り、露骨に言えば政権党へのおもねりの側面もあった。つまり、ナチスの文化政策への潜在的な順応である。

この転換は、創作史の中ではオペラ制作としてあらわれる。ヒンデミットは当初、第一次世界大戦のフランス兵とドイツ娘の恋愛物語を歌劇化するつもりでいた。しかしそれでは、フランスを敵視するナチス政権が受け入れない。そこで作曲家は方針を転換し、グリュネヴァルトとドイツ農民戦争をテーマとした。

ヒンデミットがこの路線で作曲を進めていたところ、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者フルトヴェングラーから、新作の依頼があった。オペラ創作の筆を止めたくない作曲家は、歌劇の音楽素材を再構成して管弦楽曲に仕立てることを思いつく。その結果生まれたのが交響曲〈画家マティス〉である。この段階でオペラは完成していない。未来の素材を先取りする形でシンフォニーが成立した。

1934年3月の初演は大成功。しかし政権中枢の反応は違う。“御用評論家”ヘルツォークが交響曲を攻撃し、ヒトラーは来たるオペラの初演を禁じた。この作品

がというより、それまでのヒンデミットの活動、つまりモダニズムに立脚した創作が問題視された。

それを「モダニズムは若気の至り」と新聞紙上で擁護したのがフルトヴェングラーだ。この一連の騒動を「ヒンデミット事件」という。この事件の結果、フルトヴェングラーはベルリン・フィルの指揮者を解任され、ヒンデミットは亡命の道を選んだ。

続いて複雑なのは曲の造り。前掲の通り作曲家は、書きかけのオペラの素材を再構成してこの作品を組み立てた。交響曲全体はもちろん、3つある各楽章にも標題がついている。その標題とともに、交響曲の各楽章とオペラの各部分との関係を見ていこう。

第1楽章は“天使の奏楽”。これは「イーゼンハイム祭壇画」第2面（扉を一对開けた状態）の中央左側にある図像をもとにした題名で、ベツレヘムでのイエスの生誕を表している。この楽章は音楽面では、オペラの序曲をそのまま利用する。古謡「3人の天使が歌う」を主題とする序奏ののち、3つの主題を持つソナタ形式の主部が続く。

第2楽章は“埋葬”。祭壇画第2面の中央下部にある、イエス埋葬の光景を下敷きにする。こちらの音楽は、オペラ第7景の第1場と第2場とをつなぐ、きわめて緩やかなテンポの間奏曲を基とする。なお、オペラは全7景構成だ。

第3楽章は“聖アントニウスの誘惑”。祭壇画第3面（扉の二対目を開けた状態）の右扉の図像で、誘惑を象徴するさまざまな怪物の責苦に、アントニウスが苛まれている。アントニウスはこうした誘惑に打ち勝って、修道院制度を始めた聖人として認められている。音楽はオペラ第6景の序奏に、同景第2場の一部分が声楽抜きで結び付けられている。その後、新たに作曲した部分が続き、同景第2場の最終曲を結尾部として作品を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1933～34年／初演：1934年3月12日、フルトヴェングラー指揮、ベルリン／演奏時間：約25分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、
トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、グロッケンシュピール）、弦五部